

## 第37回 「なぜなぜ分析」ワンポイント応用編

ここでは、拙著の本に紹介していない応用編について、紹介したいと思います。

あわせて、「なぜなぜ分析」の基本ルールについては、ぜひ当社ホームページ「会社概要」に記載いたしました書籍等でご確認下さい。

2008年3月27日

有限会社 マネジメント・ダイナミクス

小倉 仁志

[jin-ogura@management-dynamics.co.jp](mailto:jin-ogura@management-dynamics.co.jp)

### 「なぜなぜ分析」での事象の捉え方:「なくなってしまった」と「ない」の違い

私たちは、あまり意識せずに、日ごろ言葉を使って物事を考えたり、コミュニケーションしたりしています。

ただ、よく考えてみると日ごろ使っている言葉には、先入観の入った言葉がかなり使われているようです。

たとえば、昨日皆さんがある場所に置いたはずの大事なものが、その場所になかったとします。昨日大事なものを置いた後の皆さんの行動については、まだ検証していないものとします。

こんな場合、皆さんならその事象をどのように捉えるでしょうか? 「なくなってしまった」でしょうか、それとも「なかった」でしょうか。

さらに質問です。どちらの捉えの方が、事実を捉えた表現でしょうか。

答えは、「なかった」です。

「なくなってしまった」というのは、その言葉自体に先入観が入ってしまっています。

どんな先入観かといえば、たとえば「誰かが持って行ってしまった」とか「自分の身の回りから離れたところに移されてしまった」といったようなことです。

「なぜなぜ分析」に取り組む場合、分析の課題として取り上げる事象はそんな先入観がない表現で捉えなければなりません。

先入観が入った表現を用いると、どうしてもその方向に次の「なぜ」が誘導されてしまいます。

そうすると、その先は真の犯人にたどり着くことができなくなってしまうかもしれません。

「なぜなぜ分析」に入る前に、事象を捉えた表現が、事実を適切に表現したものであるかどうかをまず確認してから取り組みましょう。

以上は、「なぜなぜ分析」の事前チェックポイント③「表現のしかた」の一部(講習会等の内容の一部)をご紹介しました。

もし、具体的な事例の「なぜなぜ分析」の指導をご希望される方は、遠慮なくご相談下さい。

また、分析を実施していきながら、会社の仕組みや組織を活性化させたいとお考えの方も、ぜひご相談ください。皆様方のお声をお待ち申し上げます。